現代中国における日本語メディア史の研究
―日本理解を支えたメディア関係者のオーラルヒストリーから―

田中　祐輔
（東洋大学国際教育センター　准教授）

キーワード：中国国際放送・日本理解・日本語教育史・オーラルヒストリー

１．研究の背景

1-1. “アジアの時代”における日中関係の役割

尖閣諸島問題の再燃以降、日中関係の冷え込みが指摘され、両国において冷静な事態の把握と、正確な相互理解が喫緊の課題であると述べられている。中国では、悪化している状況の改善が図られ、公人が直接的に日中文化交流の重要性を述べる機会も増加している。2015 年 5 月には、約 3 年ぶりに中国での日本映画の上映が許可され、直近の「日中共同世論調査」では両国間において日中関係を「悪い」とみる割合が減少している（特定非営利活動法人言論 NPO2017）。2017 年 11 月 22 日には程永華駐日大使が公の場で両国関係は改善に向かう雰囲気にあるとの見解を述べた（人民網日本語版 2017）。事態が前向きな方向へ向かうことは喜ばしく、新たな展開が期待されるが、これらの状況改善に向けた動きもまた、最終的には情勢次第という側面は否めず、打開策や抜本的な解決には至っていないというのが実情である。21 世紀は「アジアの時代」とされ、その中心的役割を担う日本と中国との関係改善のための相互理解は必要不可欠であり、広くは世界情勢の安定と連携強化を促す極めて重要なものと考えられる。

1-2. 中国における日本理解を支える世界最大の日本語学習熱

こうした中、中国における日本理解を着実に支えてきたのが、日本語学習である。国際交流基金による直近調査では、学習者の数は約 95 万人に上るとされ、海外の国・地域の中で最多である。特に、高等教育機関で学ぶ学習者が多く、世界全体の 6 割超を占め（国際交流基金 2017）、留学や就業等を通じて将来の日中関係を担う人材育成の場となっている。日本への留学者数や日本で就職する学生数も世界最多となっており、高等教育機関で学ぶ留学生総数に占める中国人留学生は 40%を超え（独立行政法人日本学生支援機構 2017）、日本で就職する留学生総数に占める中国からの留学生は約 60%に達する（法務省入国管理局 2017）。他に類例のない規模と

密度で日本と中国との人材交流は進んでいるが、その支えとなっているものの一つが、中国における日本語学習・日本語教育であると言える。

２．問題の所在

2-1. 国交回復前の日本理解を支えた日本語学習とはいかなるものだったのか

量・質ともに世界の日本語教育を牽引する立場にある中国の日本語教育について、その傾向が顕著となったのは 1980 年代における日中間のヒト・モノ・カネ・情報の往来の活発化である。図１は、1979 年以降の日中貿易額と日本語学習者数の推移を示したものである。

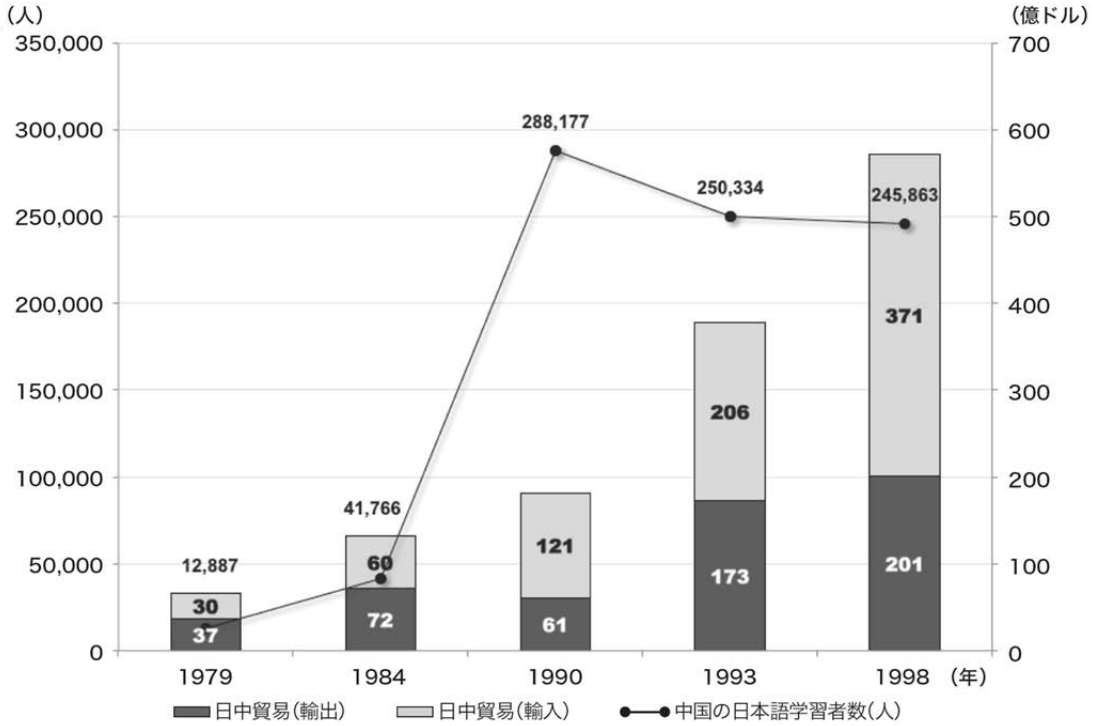

図１　1979 年から 1998 年までの日中貿易額と中国の日本語学習者数の推移[1]

こうした関係深化の発端として広く知られている事柄は、1972 年の日中両国政府による共同声明[2]に基づくいわゆる国交正常化と、1978 年の日中間の平和友好条

[1] 外務省（2008）と国際交流基金が発表した日本語学習者数を参考に筆者作成。

[2] 1972 年 9 月 25 日、田中角栄総理が訪中、日中両国政府による共同声明が発表され、日中国交正常化が宣言された（9 月 29 日）。これを記念して、日本から中国へオオヤマザクラとカラマツの苗木が、中国から日本へはジャイアントパンダが贈られた。1973 年 1 月には、中華人民共和国駐在日本国大使館が設置され、2 月には、日本国駐在中華人民共和国大使館が設置された。

約[3]による強力な交流推進である（田中 2015）。そのため、逆に言えば国交回復前の日本語教育や日本に関する学習はそれ以降に比べ充実したものではなく[4]、時には日本語を口にすることだけでも危険を伴う状況もあったという[5]。

しかしながら、「歴史的な快挙」[6]として語られる 1970 年代の日中関係の大きな転機とその後の急速な関係深化について、それが純粋且つ何からも隔離された状態で無から生み出されたと考えることは難しい。両国間の交渉や対話には相手国に関する情報や理解は勿論のこと、実務担当者同士の連絡や意思疎通、閣僚級の協議といった場面においても、現実問題として中国側に日本語人材が全く存在しなければ実現困難である。政治的側面に関わらず経済や文化等の交流においてもそれぞれに

---

[3] 1978 年、日本国と中華人民共和国との間の平和友好条約が調印され、日中交流が更に進むこととなった。1979 年 12 月の大平正芳総理訪中時に日中文化交流協定が締結され、日中間の交流のさらなる深化への道筋がつけられた。1979 年以降、文化・経済・政治など、あらゆる方面でヒト・モノ・カネの行き来が更に活発化する中で、日本語教育の規模も拡大を続けていった。日本語学科も増設され、「1978 年は日本語科のある大学は 33 であったのに、1979 年 9 月は 46 と急速に増大している」（国松 1982：707）という状況となった。大平正芳総理と華国鋒主席との第二回首脳会談の記録には、大平総理より「（イ）中国現代化に対するわが国の協力、（ロ）いれい訪中団、（ハ）アワまる、（ニ）日中資源エネルギー問題、（ホ）特恵供与、（ヘ）対中技術協力、（ト）留学生交換、（チ）科学技術協力協定、（リ）文化交流、（ヌ）日本語教育に対する協力について略々わが方において準備おきの発言要領に基づきわが方立場を述べられた」（外務省 1979a：2）として、日本側からの日本語教育の協力等が述べられ、回答の中に「文化交流の重要性についての貴総理の説明に賛成であり、日本語教育の 5 年間にわたる計画の提案に賛成し感謝する。中国と日本は文字が一しょなので両国にできることはたく山ある。」（外務省 1979a：5）との返答があったことが記録されている。また、大平正芳総理の中国訪問に関する共同新聞発表では「両国首脳は、大平総理大臣の中国滞在中に日中文化交流協定が署名されたことに満足の意を表すとともに、更に、科学技術協力協定を締結するため明年の出来るだけ早い時期に交渉を開始することに合意した。大平総理大臣は、国造りの基礎は人造りにあるとの認識から中国の留学生の日本への受入れを始めとする文化面における協力及び技術協力を積極的に進める旨述べるとともに、特に文化面における協力の一環として、中国における日本語学習を促進するため明年度以降具体的な形で協力する意向を明らかにした。」（外務省 1979b：5）と発表されている。

[4] 「1949 年の新中国成立から日中国交正常化が実現するまでの 23 年間、日中両国の民間交流に参加したのは、日本側の少数の政治家や企業家、ジャーナリスト、活動家だったのに対し、中国側からの参加者はなおさら限定されていた。高級幹部や対日担当者と業務部門だけであって、国民は完全に蚊帳の外に置かれていた。」（胡 2012：62-63）

[5] 「1966 年 6 月、プロレタリア文化大革命がはじまるとまもなく、外国語教育は、ほとんどおこなわれなくなった。この時期、中国はアメリカ合衆国を中心とする資本主義陣営とも、ソ連を中心とする社会主義陣営とも敵対し、アルバニアなどわずかの国と友好関係を持つ以外は、国際的に孤立していた。そのため、中国国内では、個人が外国となんらかの関係を持っているというだけで批判の対象とされ、ほぼすべての外国語が敵性言語であると解釈された。もちろん日本語も例外ではなく、『満州国』時代に習いおぼえた日本語を不用意に口に出すことは非常に危険をともなうことであった。」（本田 2012：107）

[6] 「中国との国交正常化こそは重要な戦後処理の一つであります。この処理が終わったことによってほんとうに戦後は終わった、日本人はひとしくそう思ったに違いありません。この重要な大問題を、就任早々田中総理が解決されましたことは、日本の歴史に永久に残る一大快挙であると言っても言い過ぎではありません。首相の輝かしい功績であると私は確信をもって申し上げたいのであります。」（第 070 回国会予算委員会第 2 号（1972 年 11 月 2 日）議事録、江崎真澄委員発言）

活躍した日本語人材がいたことは広く知られている（伊藤 2000）。特に、直前に生じた文化大革命という時期に完全に日本語学習が中断されていればその後の急激な日中間の交流は困難であり、そこには日本語学習や教育が確かにあったと考えられる。

正式な国交がなく、さらには中国の国内も激動の状態、という現在とは比較にならない状況下において将来における日本理解と交流を担う人材の育成が行われたプロセスがあるとすれば、それは、現在の日本と中国が直面している困難を解決する際にも極めて重要な示唆を与えてくれるだろう。とりわけ、過去の困難な時期において、両国間の相互理解と交流に必要不可欠な日本語学習・日本語教育がいかなる形で行われ、政治的・経済的・文化的な様々な側面から両国間の関係構築を実現させた礎がどのように築かれたかについて、通時的視点からの考察が必要となるものと考えられる。

2-2. 現代中国の日本語教育史の観点から

そこで筆者は、1949 年の中国建国後から現在にいたる日本語教育の現代史について、主に教育内容と手法に着目した考察を行ってきた（田中 2011・2012a・2012b・2013a・2013b・2013c・2013d・2014a・2014b・2014c・2015・2016）。現代中国建国後 70 年の歩みの中で、中国の人々は実に粘り強く日本語を学んでおり、それは硝煙の臭いが残る建国直後も、社会的混乱が生じた文化大革命期も例外ではない。そうした時期には、かつて戦火を交えた相手国の言語で、異なるイデオロギー体制の国の言語である日本語を公に使用したり学んだりすることに極めて強い制限が存在したこともあったが[7]、中華人民共和国の対外向けラジオ放送・新聞・機関紙は例外的に日本語による情報配信が許可されていた。

例えば、日本語放送[8]として著名な中国国際放送局による放送は 1941 年から開始されており、新中国建国後は文化大革命の影響で教育機関における日本語教育が一

---

[7] 「どういう内容かといったら、中国の事情を書いた人民公社とか、大躍進とか、そういった内容の物ですね。日本の教材は全然使ったことがない。その当時は使ってはいけないというか、全然。」（L6 氏）「（※1970 年において日本は）まだ当時は敵国だったんでしょう。まだ日本のラジオ聴いてもダメだった時代ですからね。（中略）私たちが大学に入ったとき（※1970 年）にはですね、日本人の先生のカセットテープも一切ですね、取り下げられ、普通誰でも聴ける状態じゃなかったんですよ。」（L7 氏）

[8] 日本国外から配信される日本語による国際放送を指す通称。1942 年に放送開始となった『Voice of America』（アメリカ）、『Radio Moscow』（ソビエト連邦）、1943 年放送開始の『Bible Voice Broadcasting』（イギリス）の他、複数の国や地域による放送がある。井川（2016）が指摘するように BCL（Broadcasting Listening）ブームが起こったり、「北京放送を聞く会」等の組織的なリスナー活動が生まれたりしたケースが見られ、文化理解に大きな役割を果たした。

時中断された時期においても、あるいは、中国の内陸部や山村といった海外の情報や人的交流が非常に少ない地域においても電波が届くところであれば、日本語に触れる貴重な機会を提供していた。また、日本語教科書に掲載される学習用の文章としても『人民中国』『北京週報』『中国画報』といった日本語メディアの記事が用いられていたことが筆者によるパイロット調査によって明らかとなっている[9]。これらは、日本語教科書に掲載されるだけでなく、記事そのものが日本語に触れるという意味では格好の材料であった[10]。国交回復前の中断期とされる時期にすら、僅かなチャンネルではあるが日本語に触れる機会が確保され日本語人材が途絶えなかったという意味で、対外向け日本語メディアがその後の日中国交回復や関係深化の礎に一定の貢献を果たしたと言えるだろう。

2-3. 国交正常化以前に中国の日本理解を担った“日本語メディア”研究の必要

では、そもそもこうした日本語メディアはどのような人々によって担われ、どのように配信され、どのような形で日本語学習に役立てられたのであろうか。冒頭で述べたように、戦後 70 年を迎えた日中両国の関係は、変容する世界情勢と共により複雑化し、楽観視できる状況ではない。現在と未来のよりよい日中関係と相互理解を考えるために、極めて困難な時期に設けられ、中国の「日本理解」を支えたものの歩みとその当事者たちに着目した研究が求められるものと考えられる。

中国における日本語メディアに関する資料と研究には、次の三つの流れを把握することが有益である。第一に、機関そのものが記録した資料である。後述する他のものに比べ比較的多く、本研究が中心的に対象とする「北京放送」については、胡主编（1996）、中国国际广播电台史志办公室编（2001）、李丹主编（2002）、陈主编

---

[9] 例えば、北京大学日语教研室编（1964）『日语』（第二册）商务印书馆の第 20 課「上海の外灘」は夏衍『中国画報』1958 年 8 月号によるものであり、北京大学日语教研室编（1964）『日语』（第三册）商务印书馆の第 2・3 課「母の思い出（一・二）」は朱德『解放日報』1944 年 4 月 5 日によるもの、第 5 課「文章を正確にいきいきと書くために」郭沫若『人民日報』1958 年 4 月 1 日付（同じく 22 日付『アカハタ』による）、第 7 課「大雪山をこえる」は陳其通『中国画報』1956 年 7 月号「二万五千里長征の思い出」によるものである。さらに、国交正常化以降も上海市大学日语教材编写组编（1975）『日语（日语专业用）』（第三册）上海人民出版社の第 9 課課外読物「魯迅と藤野先生」は『人民中国』1973 年 12 月号によるもので、上海外国语学院日语教研室编（1981）『日语（日语专业用）』（第四册）上海译文出版社の第 14 課「周総理との出会い」は有吉佐和子（談）『人民中国』1979 年 3 月号によるもの、そして、周平・陈小芬编（2008）『新编日语（修订版）』（第四册）上海外语教育出版社の第 15 課応用文「子供団長」は『人民中国』1992 年 5 月号、第 16 課会話は『人民中国』1993 年 2 月号、第 17 課会話は『人民中国』1991 年 9 月号、第 17 課応用文「世々代々友好的につきあっていこう」は『北京週報』1991 年第 14 号、第 18 課会話は『人民中国』1993 年 3 月号によるものである。

[10] 「（質：そういう『人民中国』とか『北京週報』の日本語で書かれたものというのは、北京で生活して買えたんですか？）買えます。新華書店とか外文書店で買えます。」（L4 氏）

（2006）、傅主编・中国国际广播电台日语部编著（2011）などがある。第二に、所属するスタッフや関係者等によるエッセーや記録である（壱岐 1991；陳 2001；鳥越 2001；安藤 2006；張 2006；小池 2009；前田 2010；李著・傅· 姜訳 2013）。第三に、伊藤（1988）や坂東（2007）、宋（2012）など、日本語メディアそのものが研究対象として記述されたものである。

2-4. 不足する日本語人材育成（日本語教育）の視点による考察

上述のような多数の示唆に富む先行研究がある一方で、両国間の相互理解と交流に必要不可欠な日本語学習・日本語教育が日本語メディアを通していかなる形で行われ、政治的・経済的・文化的に重要な場面で高い質でのコミュニケーションを実現させる足場を構築したかについて通時的視点からするもの については、少なくとも筆者の認識する範囲においては極めて限定的である。その理由としては、1966 年から 1976 年にかけての文化大革命によって記録や資料が散逸したことや、日本語メディアの主目的ではない“日本語学習”や“日本語教育”に関する記述があえて残される理由もなかったこと、また、日本語メディアに関係した当時者たちの足跡が意識的に記録されるようになったのはここ数年のことであることなどの事情がある。つまり、情報を発信していたメディア側についても、また、それを受けていた学習者側についても、日本語の学習や教育の視点から記録されたり考察されたりした資料が極めて少ないのである。

2-5. 求められるオーラルヒストリー調査

手立てとなる資料が限られているということは、その実態を明らかにするために、文字資料として残されているドキュメントの調査や、機関が発表している公式統計調査の二次分析といった手法に加え、当事者であるメディア関係者と当時の学習者にアプローチする研究が喫緊の課題とされているとも言える。「当時の人々にとっては、あたかも空気をすうのとおなじくらい、自明のことなのだが、後世の人々にはなかなかわからない。当然のことは決して文書資料には残らない。」（御厨 2002：62）という実態に当事者へのオーラルヒストリー調査からアプローチし、証言から立ち上がる歴史から考察してゆくことが現代的課題として求められていると言える[11]。

---

[11] インタビューを用いた研究の限界は、対象者の記憶違いや、考えの変容の可能性、あるいは、どこまで普遍性のある話なのか（その人物だけに限られた話題であるのか、それとも研究テーマ全体の中に位置づけられる話題なのか）など、複数の面で指摘できる。しかしながら、個々の取り組みと、それらが集合することによって生じる連関の上に日本語教育をめぐる事象が成り立つこともまた事実であり、日本語メディア史を探るには、限界はあるものの個々の証言やエピソードにも目を向けた調査が必要であると考え、

日本との国交正常化前の中国において、日本語メディアはどのように活用され、それに携わった当事者はいかなる形で日本語情報の発信に携わり、どのような考えと手法で職務を全うしたか。日本語メディアの配信と受信双方の当事者へのオーラルヒストリー調査が求められるものと考えられる。

３．研究の目的

そこで本研究では、1949 年から 1970 年代初頭までの国交正常化以前に中国における日本語の情報発信や交流に多大な貢献を果たした放送局・新聞社・雑誌社の通訳、翻訳家、アナウンサー、記者、そして、日本語メディアを通して学んだ当時の学習者へのオーラルヒストリー調査を実施し、得られたデータの分析と、関係資料による考察を行うことで、中国の深い「日本理解」を支えたものを、メディア史の切り口から明らかにすることを目的とする。

４．研究の方法

4-1. ３つのアプローチ手法と手順

以上の目的と趣旨を実現するために、本研究では主に次の 3 つの手法と手順で調査と考察を実施した。(1) まず、日中国交が回復する前の 1949 年から 1970 年代初頭までの現代中国の日本語メディアについて、その運営に携わった関係者とそれをもとに日本語を学んだ学習者に対し表 1 のインタビュー調査を行った[12]。調査協力者は、スノーボール・サンプリング法によって選出され、協力者に対し、半構造的面接調査を行なった。得られた回答は文字化し、Qualitative Data Analysis ソフト（MAXQDA12）に読み込み、佐藤（2008）に基づきデータをセグメント化し、コード名をつけた。同一コードの回答（非同一人物）が複数存在するものを一つの概念と見なし考察対象とした。データの最小単位は発話から話者交替までとした。引用には協力者名を記した。(2) 次に、インタビューで得られた調査結果の裏付け、あるいは、傍証としてドキュメント調査を行った。具体的には、個別の回想録や機関の記念誌をはじめ、中国の日本語メディアについて記録された資料、担当者の業務記録、日誌、および写真を収集することを目的とし、中国国家図書館、北京首都図書館、中国国際放送局、人民日報編集部、北京週報編集部における資料収集を行った。(3) その上で、中国国家統計局や新華社が発表した中国におけるメディアの

インタビュー調査を研究手法として採り入れた。

[12] 研究助成を受けた 2016 年 1 月から 2017 年 12 月までに 12 名（実人数）に実施し、その結果の考察には、筆者がパイロット調査で行っていたインタビュー結果も用いた。

影響力調査や、日中の官公庁や民間団体が発表した公式統計調査の二次分析を行い、インタビューとドキュメント調査結果の裏付け、傍証とした。

表１　インタビュー調査協力者

No.	出生年 出生地	所属 業務内容	入社年	調査日	調査地	No.	出身地	学習年	調査日	調査地
M1	1929 年 神奈川県 大磯	北京放送ア ナウンサー	1963	2014.03.04 2015.03.02 2016.02.28	北京	L1	上海	1977-1979	2011.12.27	上海
M2	1963 年 瀋陽	『人民中国』 編集者	1989	2016.03.03	北京	L2	上海	1971-1974	2011.12.27	上海
M3	（未確認）	北京放送ア ナウンサー	1975	2016.03.03	北京	L3	上海	1975-1979	2011.12.27 2017.08.12	上海
M4	1936 年 奈良	北京放送ア ナウンサー	1966	2016.03.06 2017.08.05	北京	L4	北京	1978-1982	2013.08.21 2016.02.29	北京
M5	1934 年 大阪	北京放送ア ナウンサー	1963	2016.03.06 2017.08.05	北京	L5	南京	1970-1974	2014.02.28	南京
M6	1937 年 横浜	北京放送ア ナウンサー	1963	2016.03.09	北京	L6	北京	1944-1945	2014.03.07	大連
M7	1927 年 横浜	北京放送ア ナウンサー	1953	2016.03.09 2017.08.06	北京	L7	大連	1970-1974	2014.03.08	大連
M8	（未確認）	『北京週報』 翻訳者	1963	2016.03.05	北京	L8	大連	1960-1965	2014.03.09	大連
M9	（未確認）	『北京週報』 通訳者遺族	—	2016.03.07	北京	L9	日本	—	2015.03.10	上海
M10	（未確認）	『人民中国』 翻訳者	1973	2016.03.08	北京					

本稿における考察に際しては、とりわけ言語学習に必要不可欠でありながら、国交正常化前には入手が困難であった日本語音声を配信していた北京放送に重点を置き、分析を進める。

以上、3 つのアプローチ手法と上述の手順を用いて、中国における日中国交断絶期の「日本理解」とメディアとの関わりについて、とりわけ、その背景と実態に着目し、そこに生きた人々の証言を記述することで、中国における深い「日本理解」を支えた日本語学習と教育の歴史を、日本語メディアの切り口から明らかにする。

５．結果と考察

5-1. 中国国際放送局の概要

中国国际广播电台日广播（中国国際放送局日本語放送）は、1941 年 12 月 3 日より放送を開始し、中国国際放送局最初のラジオ番組であった。毎日 8 時間の放送が行われ、中国東部、朝鮮半島の一部地域、日本などの地域に届いていた。放送開始当初、番組内容は反軍国主義の宣伝が主とされたが、改革開放以降、番組の内容は

エンターテインメント性を持つものも含められるようになり、2000 年代に入ると、クイズ番組など競技類番組が開設された。慣習として、中国国際放送局日本語放送の時報の際の局名告知は、「中国国際放送局」ではなく、「北京放送」となっている。放送開始から今日までの歩みを図 2 に年表として示す。

図 2　中国国際放送局日本語放送年表[13]

5-2. 日本語学習に用いられた北京放送

1953 年に帰国し、1963 年に上海市の大学教員となった L9 氏によると、60 年代初頭には、既に北京放送を用いた教育は高等教育機関などにおいて組織的に行われていたと言う[14]。1960 年から 1965 年まで大連市で日本語を学び、その後大学教員

---

[13] 写真資料出典：上段左から、(1) 李主編（2002：26)、(2) 李主編（2002：30)、(3) 李主編（2002：28)、(4) 李主編（2002：31)。下段左から (5) 元中国国際放送局アナウンサー添田修平氏提供、(6) 元中国国際放送局アナウンサー添田修平氏提供、(7) 元中国国際放送局アナウンサー添田修平氏提供、(8) 中国国際放送局日本語部提供、(9) 元中国国際放送局アナウンサー添田修平氏提供。

[14] 「ラジオ放送を録音して聞かせて、耳の訓練とか。あとは補導というか、課外補導ですよね。そういうことを担当していた。（中略）北京放送です。北京放送を録音してテープに取って、学生に聞かせるわけですね。だから教科書というのはないんですね。その都度録音取ってやってたわけ。（中略）何回も繰り返せるように、単語を整理して。あれは一つは記憶力とも関係あるんですよね。1 回に大体最初は 3 回聞かせて一段聞かせて。そうすると質問するわけだよね、『内容はなんだ？』と。そうすると覚えてない人もいるし、しっかり覚えてる人もいるという。これは記憶力に関係してくるわけですよね。あとからたっても聞いても全然意味が分からなかったという人も出てくるわけですね。そうするとこれは記憶力だけではなくてまず内容的に理解できていないという。ですから一つは理解、それから記憶。」（L9 氏）

となった L8 氏や、1977 年から 1979 年まで上海で日本語を学び、その後大学教員となった L1 氏は当時日本語を学ぶのに十分な教材はなく、日本で発行されたものは利用できなかったと述べ[15]、もっぱらガリ版刷りの配布プリントで学んだと言う。1970 年から 1974 年まで南京市で日本語を学び、その後大学教員となった L5 氏は、北京放送を録音した蓄音機をクラスの学生で囲み共に学んだことが今でも懐かしく思い出されるという[16]。また、1971 年から 1974 年まで上海市で日本語を学び、その後大学教員となった L2 氏は北京放送を聴解学習に活用したことを述べ、国内事情を海外に発信するという北京放送の特性から、内容理解がしやすく学習に役立ったという[17]。1975 年から 1979 年まで上海市で日本語を学び、その後大学教員となった L3 氏は、農村で活動しながら学ぶという当時の社会環境の中で、日本語学習のためのヒアリングには北京放送を用いたと述べ、電波の干渉がほとんどない地域である農村が、かえってラジオを受信するには好環境につながったと述べる[18]。ただし、逆に発信される電波が通らない地域では受信困難であったケースも見られる[19]。

---

[15]「日本の教材は全然使ったことがない。その当時は使ってはいけないというか、全然。（中略）こんなキチンとしたものはないです。プリント式です。」（L8 氏）「当時はプロレタリア文学。『蟹工船』とか、徳永直とか、宮本百合子とか。（中略）後はやっぱり『北京週報』とか『人民日報』を日本語に翻訳したものを読んだ。日本語の養成班の時にも『北京週報』とか北京放送とか、中国の言葉を日本語に翻訳したもので勉強した。自由に、今の大学みたいに日本の小説とか日本の新聞とかが手に入らなかった。」（L1 氏）

[16]「外国語の勉強にはヒアリングの練習が必要ですね、その時はやっぱり蓄音機一台を 20 名の学生が囲んで『分からない、もう一度回して』と聴いたりしました。普段の会話もあったのですが、後には NHK、中国の北京放送をテープに録って聴いたりしました。非常に面白い風景。今考えると非常に懐かしいんですけども。」（L5 氏）

[17]「聴解の内容としては北京市で日本向けの、『こちらは北京放送です』って言うようなね、あれはだいぶ前からあったんですけど。（中略）で、わかりやすい内容。知ってる、わかる。」（L2 氏）

[18]「それ（※北京放送）は非常に大きな手助け、というか、ヒアリングの一番重要な内容です。ほとんど日本人の声と変わんない、発音で。『こちらは国際放送です』とか。『こちらは北京国際放送です。今からニュースを伝えます。まず主なニュースです』とか、今でも、短波で、ラジオの短波でしか受信できない。だから私たちが居たところは田舎だからね、そんな電波の干渉はないから。農村。（中略）当時は、（※所属した外国語学部の農村でのクラスには）英語と、フランス語と、日本語、全部で 6 つのクラスあって、英語は、4 つのクラス、フランス語と日本語はそれぞれ 1 つ。で、全部で、一年度に、200 人だったっけな。例えば、私たちの日本語科の学生は、ええ、なんというの、食堂の仕事をしたり、野菜を作る所なんですね。野菜クラスっていう。あとは豚を飼うとか、家鴨、にわとり、だったですけど。先生は自由です。でも一週間に 1 日だけは、必ず学生と一緒にしないといけない。他は自分勝手にすればいいだけですね。復旦大学、養成班という。復旦大学外国語培訓班。培訓班は独立した機関、教師の機関なんです。教師が上海市内から派遣されて、そこで教えます。そこで、日本語学とか研究室全然ないんです。だから当時の予想としては、労農兵の大学生と同じように、3 年間勉強したら大学生と認められることになっていた。」（L3 氏）

[19]「中国の大陸の奥地のほうになると、やっぱりわからないですね。日本語放送。」（M1 氏）

北京放送は、中国国内の状況や情報を海外に発信するという特性を持つことから、当時の社会状況に即したものであり、同時に、そうした特性が学習者にとっては聴き取りやすい要因にもつながり、日本語学習用の教材として個人にも学校にも積極活用されていたことが明らかとなった。

5-3. リスナーからの反響としての“お便り”

こうして、本来北京放送が想定していなかった中国国内の日本語学習者も北京放送のリスナーとなっていたわけであるが、1963 年に入局し北京放送のアナウンサーを担当していた M1 氏は、そうしたリスナーからの“お便り”も後には放送局に届くようになったという[20]。このお便りについては、1950 年に日本のリスナーから送られたのが始まりであり、東京からシンガポール、そして香港へと、幾度も経由し数ヶ月を経て放送局に届けられた。1950 年代初頭は一年に 4、5 通であったものの、その数は増加し[21]、1954 年には年間 800 通、1956 年には年間 4,000 通を超え、1965 年には 74,978 通にまで達している。正確な数値が残されているのには理由があり、放送局では届いたお便り全てを確認し、ラジオ番組でとりあげたり、返信作業をしたりと、非常に大切に扱われていたからである。1963 年から北京放送でお便りへの返信や整理を行う返信組で専門家として働いていた M5 氏は、膨大な数のお便りに対し、「リスナーは神様」という考えで[22]、メンバー総動員で一生懸命に返

---

[20] 「手紙がよく来ました。日本語放送に。（中略）学生やなにか民間人もね、日本語の学習熱が中国でも盛んになって来たからね。一番手っ取り早いのは北京放送の日本語を聞いたら学習できるということで。それについての感想の手紙がしょっちゅう日本語放送に来ました。そのうち番組を作って、日本語放送の聴取者、リスナーですね、リスナーのお手紙からという番組を作って、上海のナニナニ生まれの学生のダレソレさんから昨日こういうお手紙をいただきましたって、一文を読んで。そういう番組を作って、喜ばれたですよ。それは。」（M1 氏）

[21] 「一番最初の頃、50 年代の頃は大変だから、手紙だって日本から香港回り、あるいはモスクワ回りから来たわけだ。1 年に 4、5 通くらいしかなかった。それがだんだん 55 年、50 年末期、60 年になると放送時間が長くなるし、そして番組も充実してよくなってますから。そうなるとどんどんお便りも来て、大体 300 通から 500 通、一月ね。」（M5 氏）

[22] 「僕たちもバックのほうも、できるだけそういうように。あの当時。スローガンとしては『リスナーは神様である』と。そういうスローガンがありましたからね。やはり大事にしなければならない。（中略）リスナーの人の放送を聞いてくださること自体が非常に貴重な存在でしょう。あの国は、はるばる離れてさ、非常に不利な条件で短波放送とか中波でね。そしてもう一つはリスナーに応じた、こちらが出した反映がほしいじゃない。その放送はうまいとかあるいは国が発達してますねとか、いろんなそういうのがほしい。もう一つはリスナーの方々もいろんな層がありますから。学者もいるし、いろんな人がいる。だからいろんな提案は来るわけ。リスナーはいわゆる倉庫だよ、いろんな知っている知識のね。そういうのをおっしゃってくださる方もいらっしゃるからね。いろいろ資料は送ってくるわ、日本の新聞の切り抜きは送ってくれるわとかいろいろあるでしょう。だからリスナーというのは非常に貴重な存在だから。（中略）その点では非常にやりがいがあって。上の方もやはりそういうのを重視しますからね。」（M5 氏）

信作業や振り分け作業に取り組んだという[23]。強いやりがいを持って、返信する場合はなるべく早く返信することを心がけ[24]、また、リスナーに対しては記念品なども同封して返信をしたという[25]。1975 年に入局し北京放送のアナウンサーを担当し

---

[23] 「1 年に 10 万で、1 万通ぐらいいって、ある時はハガキきましたでしょう。だから（※一日あたり）300 から 500 通ぐらい。よく来る時は。それを処理するんだからね。だから結構スタッフも常連の人は 4、5 人であと専門家の方の奥さんたちがお手伝いをして、2、3 人いらっしゃって。あと臨時工という放送局関係の家族の方々に応援して（※もらって）。12、3 人はいましたね。だからそれをあと、どういうんか、来て、切って開けてそしてそれをきちんと留めて、そしてそこにラベルを貼って。そういうのを僕たちがそれをチェックするわけだ。内容から書くわけだね。どういう物と。どれに返信するかというのをそこで決めるでしょう。その人たちも先ほどちょこっと言ったけど、（※放送局に過去のお便りが記録された）戸籍があるわけだ。そこでこの人は初めての人だ、古い人だ、それを引っ張ってここへ重ねて。それでそこへも登録してチェックしてそして返信の用意をするわけです。今度は返事の段階になると、典型文、そういうのを僕たち日本語のできる人が作成してそれをガリ版で刷って、そしてそれができあがると、それを折るわけだ。それを折る人は臨時工の女性の方々がそれをやってくれるわけだ。入れる、封をする、のりを貼る、そして中にいろんな記念品、切り紙だ、ベリカード（※受信確認証）だ、バッジだ絵はがきだと放り込むわけだ。そういう仕事をやってもらわないとそれを毎日封してそれを専門に出す部門がありますからそこへ送り出すわけだ。そういう仕事が待っているわけ。それが終わってからどうするかと。それをまた今度はもう一度これは編集処理、これはお便り番組にとそれぞれより分けして。」（M5 氏）

[24] 「あの頃は、やはりラジオとかそういうのがそれほどに普及していませんからね。だから皆さんがいろんなおそらく田中さん（※筆者）は覚えているかどうか。いろんな機種が自分で作ったりするラジオもあるんじゃない？（中略）そういうのを作ったりしてさ、そういうクラブの人たちが一生懸命作ったりして、そういう愛好者が集まって、あるいは深夜に集まってそれを聞いて。だからそういう苦労された方から手紙が来ると、こっちは本当に泣けてきますよね。感動しちゃう。（中略）やはりどうしても、できたらその手紙をより早く出そうという気持ちがあるでしょう。というのは、だんだんと郵便事情が延びてくるわけだ。さっと日本からも早く来て、こっちからも。ところがだんだん時間が長くなるでしょう。それが怖いわけだ。だからどうしてもできるだけ早く出そうと。局全体の気持ちとしても。行きっぱなしでリスナーの方が待っても返信が届かない。届いたのがどうかというのが心配でしょうし。だからこちらのほうもできるだけ早く出したいと。そういう点では仕事の上でというか、苦労して頑張ったという気持ちというか。それ以外に別に家庭のほうも困ったとか病気になったとか、そういう点では非常に恵まれていましたので。もう仕事一偏でやってきましたから。特に仕事の方面で頑張ったという。（中略）だからそういう苦労をされたリスナーの方が手紙に書いていらっしゃるとこっちも非常に感動して。同時にまた自分のいろんな私事、例えば『結婚しました』『出産しました』とかね。そういうことも伝えてくださってね。そういうことだと。これは、私たちは本当に親しい感動で接してくださると非常に感じますよね。こういうのはその手紙からね。本当に全く手紙だけれども、こうしてはるばると放送を聞いて私たちにそういう気持ちを伝えてくださる。これは非常に貴重なことですよね。だからそういう点ではこちらも感動する。」（M5 氏）

[25] 「それと同時に記念品というのを考えないとね。毎年、毎月同じ物ではリスナーの方に申し訳ないし、いろいろと考えなければね。専門にそれを考える人もいるし。もちろん僕たちもシステム大きいから日本語部だけじゃない。あとは東南アジア、ヨーロッパ、アメリカ。そういう部もお便り返信組というのがあるから、他のそういう一括して管轄している一つのシステムがあるから、そこでは、もちろん、いろんな物を生産してくれます。絵はがきやだ何だかんだ印刷してくれて。しかし、日本的な切り紙は。こういう切り紙細工。そういう物はほかの国はあまり利用しない。あまり興味はない。ほかのリスナーの方には。日本の方は非常にそういう細かい物には興味があるし、中国的なあれですから。僕たち専門にそういう切り絵細工の工場、あるいはそういう地方、そこの河北省、山西省にもそういうのがあるから、中国の三大切り紙の名所があるから、そこへ行って注文して『これお願いします』と、そういう仕事もある。」（M5

ていた M3 氏も、お便りを紹介する番組に携わり、多くの意義を感じていたという[26]。

5-4. 日本語で報じたアナウンサーたちのトレーニング

北京放送が国交正常化前の各時期において学習者や教育機関で活用されたことが前節までに判明し、とりわけ、日本語の音声が不足していた時代の重要な教材の一つであったことが明らかとなった。では、そうした放送の実際のアナウンスはどのような人々が担い、その日本語はどのように育成されていたのであろうか。

M3 氏は、発声と発音の練習等を毎日行い、それは日本語放送に携わるアナウンサー全体のことであったと述べ、他の外国語放送と比しても特別で局内でも有名だったという[27]。帰国華僑として中国に戻り、北京放送のアナウンサーとなった M6 氏は、帰国華僑でも一人前のアナウンサーとして仕事をするには努力が必要であったと述べる[28]。1963 年に日本から中国に渡り、終戦後も帰国せず 1963 年より北京

氏）

[26] 「私が入局した当時はですね、毎日だいたい 300 通くらいの手紙が送られてくるんですよ。その中から、いわゆる、やっぱり北京放送を聞いての反応とか、それから希望とか、その中から選ぶわけですね。それをまた、リスナーからの質問ですね。例えば、中国はどんなところがいいか、どんな観光地があるんですかとか、そういった質問ですね。お手紙を紹介しながら、その質問に答えるんです。またその答えでリスナーから、ああ、それよかったな、この番組を聞いてですね、中国の観光地がよくわかりましたとか、これから遊びに行きたいとか。（中略）ですから、やっぱりお便りが一番面白かったですね。面白かったというか、やりがいがある番組だと思うんですよね。8 年ほどやってたんですよ。だから私の声を聞くと、あ、このアナウンサー、＊＊＊さん（※M3 氏）だと、知ってるリスナーがいるんですよ。声だけでですね。テレビは顔が出ますから、ラジオは声だけですね。（中略）ですから本当によかったなと、あの番組をやっていて、と、つくづく思いましたよ。」（M3 氏）

[27] 「アナウンサーとしては別にね、苦労したってことはなかったと思うんですけども、やはり先生について一生懸命勉強したことはしました。発声と発音の練習とか、毎日毎日ですよ。トレーニングですよ。『あいうえおあお』とかですね、それから、『られりるれろらろ』、『ういろう売り』とかですね、毎日のようにやってたんですよね。（中略）昔って毎日 8 時ちょっと前にですね、日本語部のミーティング、会議があって、それが終わってですね、アナウンス部に戻ってこういうトレーニングをするんですね。これ、毎日ですね。だから北京放送では本当に有名ですよ。日本語部ですね、だいたい朝の 8 時半ですね、そのトレーニングの声が響き渡るんですよ。（中略）みんなで大きな声を出して練習しました。」（M3 氏）

[28] 「一生懸命勉強して一応、ニュースからです。ニュースやる前にはその前には予告。1 ページの予告ですよ。『今日の番組はこれとこれとこういうのをやります』というようなお知らせ。そういうものから始めて。1 分、たった 1 分ですよ。それから後は 10 分ニュース。5 分ニュースからですよ。5 分のニュースから勉強を始めて、それを録音に取って。それでみんなに聞いてもらって。みんなから『これなら入っていいよ』と言われたら今度は仕事できるんですけど。『まだ駄目ですね。もう少し練習しないと』と言われるとまた練習しないといけないし。（中略）厳しい訓練を受けてアナウンサーをやって。（中略）一番最初、声が電波に乗ったのはいわゆる予告でお知らせですよ。やっぱり嬉しかったです。自分で聞いたんですけど。『あ、自分こんな声してんのか』と言ったら、『そんなもんですよ』と言って。専門家に言わせると声というのはマイクが、あんたの一番いい声を取ってくれるんだと。それは訓練する中で、だから自分がマイクに向かって話してると、その反響がまた精神、神経を通して自分でいい声に変わるんですって。変えていくわけです。自分で調整するわけです。だそうです。そういう話があったんです。だから声が良

放送のアナウンサーとなった M1 氏は、日本語母語話者でも、一人前のアナウンサーになるには多くのトレーニングを要したという[29]。そうした中、日本でアナウンスの専門的なトレーニングを受けた人材が招聘され、日本で得た知識や経験を日本語部内で共有し学習に役立てたこともあった。1963 年に中国に渡った M1 氏は、東北大学を卒業し早稲田大学大学院で学んだ後、日本電波通信社に就職。東京アナウンスアカデミーにてアナウンスについて学んだ経験を持つ。そのため、渡中後に、発声練習やアナウンサー同士の勉強会に協力することが多くあったという[30]。さらに、1953 年より北京放送のアナウンサーとなった M7 氏は放送ならではの難しさもあったという[31]。

くなるはずだと。やってると。声楽家だけじゃないんだって、やっぱりアナウンサーも声はよくなると。」（M6 氏）

[29] 「一人アナウンサーを養成するのに 5 年かかりました。（中略）放送員としては 5 年かかりますね。それについて練習して、直して。で、録音の時も直して。みんな緊張で、5 分間の原稿。悪いけどね、5 分間の原稿 3 日間持ってて、練習して。で、録音する時、2 時間かかる。だから私なんか、間違ったら丸まで戻すんですよね。あの人たちは点でもできる。すごく上手。」（M1 氏）

[30] 「やっぱりね、自分で、先ほど言ったように放送用語というのが頭にありますから、これは、意味は漢字で見ればわかるけど、発音で発声した時にはわかりにくいんじゃないか。それから、これは話し言葉に直したほうがいいと、こういうことは気をつけてました。（中略）若い人たちもね、あれしたし、華僑の人にもね。発声、発音だとかね。これはもう、組長が、先ほど言った組長さんが『＊＊＊さん（※M1 氏）、一番新鮮な新しい日本語、生き生きした日本語を身に付けてきてるから、うちの若い人たち、放送に使う言葉についていろいろ指導したり、注意したりしてもらいたい』と、そういう要請もありましたしね。しょっちゅうあれしてましたわね。毎日、気がつくところをね。『これ、アクセントおかしいよ』とかよく言って。それから先ほど言ったように、北京大学だとか人民大学で日本語を勉強して、会話の上手な人が放送局で、日本語部で採用しましたから、その人たちと。国内の中国人と帰国華僑と。これが主に放送局のね、主要な人材ですね。アナウンスの方面では。それは主に組長さんで、日本語部最高の責任者がね、その録音テープを聞いて、おかしいところがあったら意見を出すわけ。で、また私に相談もあります。『＊＊＊さん（※M1 氏）、ここのところ、こんなふうに聞こえるんだけど、これでいいのかね？』とかいうことで、『ああ、そうでしたね。私、気がつかないで、聞き過ごしましたね。ああ、そうですね。ここのところの発音はこうなる。アクセントはこうなるよ』ということで、最終的にね。」（M1 氏）

[31] 「260 字が 1 分なんですよ。そうするとすごーく遅いの。後から 300 になりましたけどね。しかも私が読む原稿の下書きは、相手の人が持ってるわけです。（中略）だからすごく気を遣うわけ。もう汗がたらたら、冷や汗が流れて。（中略）テーブルがあって、時計があって。時計はスポーツに使うあの時計なんです。それで待ってて、で、こっち、録音盤、レコード。で、録音盤っていうのは 33 回転。こっちは八十何回転ですか？それを動かなくて、自分で。自分で操作するの。例えば、しばらく『草原情歌』をお聞きくださいとか言うでしょ。そしたら自分で針を回すわけ。だから非常に緊張な。もう 20 分の放送ですけども、原稿が終わったら手が重くて、何十斤の原稿を持ったみたいな。そういう緊張度がね。（中略）それから例えば停戦協定の、朝鮮の、その原稿を持ってくるわけですよね。そーっと開けて裸足で入ってきて、何が書いてあるかわかんないのよ。全然わかんない。とにかく 2 枚持ってくる。で、止めて『あと何分？』。2 枚くらいってこと。で、あと何分残ってるか、見なくちゃいけないでしょ。で、それでまた 2 分かせぐわけよね。で、終わったらだいたい 28 秒前に終わらないと、今度、アンテナを今度またよその国に回さなくちゃいけない。（中略）2 分残すんです。だから 28 分で終わらなくちゃいけない。（中略）あっ、ランプがつく、7 時半になった。で、レコードを国歌。流すわけですよ。で、終わったらそれを止める。止めてから放送できるように、自分で操作するわけです。だからすごい緊張なの。（中略）その時

5-5. 昼夜を問わず放送を支えた人々

国内情勢を海外に発信するという性質から緊急の業務も多く、昼夜を問わず放送活動は行われた[32]。重大ニュースのときにすぐに対応できるよう、アナウンサーを「値班」（筆者注：夜勤）が呼びに走ることもあり[33]、アナウンサーは放送局へ人力車で向かった[34]。緊急性の高いニュース放送の場合は録音したものを電波として発信する場所まで走って届けるが、あまりにも時間が足りないため 30 分番組を分割しながら録音し、それぞれを往復しながら裸足で走り届けたという[35]。また、当時は録音機械操作

の録音機っていうのがなくて、『钢丝』っていう、銅の細い糸。それがこのくらいの太さで、このくらいの高さで巻いてあるわけですよ。それが回るわけ。だから少し金属的な声になる。で、昔は放送したものを録音することができない。（中略）だから結局、毎回放送しなくちゃいけない。（中略）新しいニュースもありますけどね。そういうあれで。だからすごい緊張ですよね。で、書くのはペンで書いて、で、直してある。誰か直すでしょ。で、直したのを、私なんか清書するわけ。清書したものをもう 1 回確かめる。確認する。そして今度は時計を置いて練習する。その時間はあるんです。1 時間くらいあるから、だからこれをどうにか、何分の音楽を入れて、何を入れる、どのくらい余る、ということをやって、それで初めて放送に入る。放送に入る時、前の人は 2 分前に終わってるでしょ。ちょうど終わって出るところで入れ替わる。それで次の準備をする。ばーっと準備をして。（中略）それは 58 年、3 年間くらい続きましたかね。」（M7 氏）

32 「できごとは何といってもあれですね、さっきも繰り返し話しましたけども、中央の指導者の会見や談話のニュースが入ってくると、夜中何時でも明け方でも飛び起きていって、スタジオに行ってそれを録音して日本に翌日の朝ね、5 時半から 6 時半まで 30 分間、日本語放送、朝特別あったんです。（中略）それに間に合わせる。だから夜中の 2 時 3 時でもいいわけです。そのときは放送局の夜勤の人たちが（※待機している）。（中略）24 時間ね。その人たちが『周恩来がこういう、日本の田中（※角栄）のニュースが入ったから急いで出勤してください』って。電話が夜中に掛かって来る。行って、朝 5 時半のニュースに間に合わせて出すと、そういう生活でした。これが一番印象に残って、忘れられないですね。これは文革中もずっと続けましたからね、放送を。（M1 氏）

33 「そうですね。それはやはり国内ニュース組とか国際ニュース組という大きな部門があるわけです。そこから各語源組にニュースが発行されるわけです。それで必ず夜勤が一人残るわけです。アナウンサーかもしくは翻訳者が。その人がそれを受けたらそれを翻訳、自分では足りなかったら翻訳者を呼んでもらって。その頃は電話がないですからね。家になんか電話もない。宿舎にもちろん電話がないですからね。だから呼びに、『值班』の人がいるわけです。トントンと呼びにくる人がいるわけです。各宿舎にいるわけです。それでそのおじさんがトントントンとたたく。簡単には帰らないですよ、必ず顔を見るまで『はい』と言ったって駄目です。出てきてドアを開けないと。開けたら『“刚刚”ニュースが入りました』何のニュースかはもちろん言わないですけどね。『ニュースが入りましたから、すぐに事務所に来てください。すぐに来てください』『はい』それでドアを閉めておじさん帰るわけですね。『值班』という専門そういう人。電話がないから『值班』の人がいるわけですよ。（M4 氏）

34 「突っ込み。朝の放送。それで引き返すんだけど、電車もないでしょ。それで走って、“西四”まで走って。で、“西四”に人力車、まあ自転車ですけどね、寝てるんですよ。その人を起こして。お金多く出すから、って。放送局まで走ってもらう。で、3 時半に間に合わないと原稿が間に合わないんですよ。（中略）周総理の声明とか。それから停戦協定の。」（M7 氏）

35 「(※緊急性の高いニュースの放送の場合は）時間的にきついんですよ。本当は 30 分の番組なんですけど、30 分作るべきなんですけど（※原稿が）間に合わないので、先に 15 分録音したやつを送って。出しながらあと 5 分やったら 5 分持って。3 分、2 分、1 分と送る。それはもう、そういう緊張の中をしたことがあるというのを覚えているんです。（中略）緊急のやつがある。そういう仕事もやったの。だから僕たちも裸足になって。革靴脱いで裸足で走るんです。安全だから。じゃなかったら革靴で滑ったりなんか

もアナウンサーが行ったため、機器や録音済みテープを駄目にしないように緊張の連続だったという[36]。昼夜を問わず、それぞれの持ち場の中で、それぞれの役割を懸命に果たしながら放送活動は支えられていたのである。

5-6. 現在も続く日本語教育における日本語メディアの役割

1941 年の放送開始から 75 年を経て、メディアを学習に役立てた経験を持つ人材が、現在の日本語メディアを担う立場になっている。1989 年から『人民中国』編集長を務た M2 氏は、自身も『人民中国』等の日本語メディアを通して日本語学習を行った経験に基づき、2000 年代初頭から高等教育機関において日本語メディアを通した学習の場を設けていることを述べ、日本語メディアが今日においても日本語学習に活用できる可能性があると指摘し、そうしたメディアを制作する立場にある仕事に幸福を感じているという[37]。また、北京放送も、2000 年よりウェブサイトを設け、映像や記事な

すると大変だというので裸足で走ろうと。走ったことありますよ。4 階ですから。あの時エレベーター使わないんですよ。こうやって持ってパーッと駆けるんですよ。あの時若いからね。やっぱり僕たちが駆ける。二人くらいいたかな。そういうのは覚えてます。（中略）1 分で送ったら、こんな小さいので送らないでくれと。それを持って駆けていく。それで待って引っ張って、ここからストップ、スタートって。それまでやって、それで走ったらやっとそこで座って。（M6 氏）

[36] 「放送は全部録音です。録音テープをもって放送するところへ持っていくわけです。電波を出すところへ持っていく。そこに機械が 3 つ、4 つあるんですね。それで順番にちゃんと表を書いて。この順番にすぐ、日本語わからない人がそれをやってるから、後ろに紙を挟んでこの紙が倒れたら次を（※持って行って）流す、次を（※持って行って）流すとやってたわけです。そうすると途中で原稿が入るわけです。もう今晩、最後の放送にぜひとも入れたいニュースが入る。そしたらもう録音してそこで回っているわけでしょう。録音放送室で放送して、例えば 3 分のニュース、1 分刻みで時間がないから早く持って行かなきゃいけない。一人がぱっぱと持っていくわけです。私は（※アナウンスを続けているため）しゃべっているわけです。みんな機械を変えて次から次から録音してパッと持っていくんです。突っ込み原稿が 1 分半のニュースが入った、元のテープから 1 分半のニュースを削らなきゃならない。そうすると機械にこれを乗せて原稿があるから、『人民日報はこのように述べています』『ストップ』パッと次に出すわけです。そのニュースを。これを回している間に次のニュースをピッと飛ばすわけですよ。1 分半のニュースを飛ばして。『では次のニュース』そこの所を出して『はい』『と、このように語りました』『はい』こういうことをやる。ものすごい緊張です。もしその時にテープが上がっちゃったらもうおしまいですからね。駄目になっちゃうんです。（中略）今思えばすごいことをやったなと思いますけどね。そういうぶっつけで。それで 1 本入ったニュースの後ろにキロヘルツと音楽と入れておくわけです。これが 1 分半なのに 2 分削ったらこまるでしょう。だからその時に『はいストップ』『はいこっちのキロヘルツと音楽流して』『はい、ここで次のニュースが出るまで』『はい、ニュース。音楽削って』『はい、次のニュース』こういうこともやったんです。アナウンサーがやるんです。（M4 氏）

[37] 「(※日本語メディアの）第一目的はもちろんそれ（※日本語学習）じゃない。（※『人民中国』については)、もちろんやっぱり日本人読者のニーズに合わせて、中国の最新事情を理解してもらうためのメディアですね。でも、たしかに中国語の勉強、あるいは日本語の勉強の役割もあると。私自身もですね、高校時代、それを教材として日本語を勉強してきたので、だからいろいろ考えたんですよ。例えばショートショートってページがあったんです、当時。中国の短いショートショート小説。短編小説。と、日本語対訳の。それがあったので。あとはですね、例えば漢詩の日本語訳とか、そういうような連載があったんで

どの配信を行い聴取者が直接書き込みを行ったり、相互に情報交換ができたりするシステムも設けられている。現在の日本語メディアは、言葉や文化との出会いの場にとどまらず、それ自体が交流の場として機能するに至っているのだ。日本語メディアの新たな展望として、そうした国際文化交流のプラットフォームとしての役割が拓けており、本研究が明らかにした国交正常化前の日本語メディアがそうであったように、現在の日本と中国との言葉と文化の相互理解と交流促進に時代に即した形で少なくない役割を果たしてゆくものと考えられる。ひいては、21 世紀のグローバル世界の中で、「アジアの時代」を担う日本と中国との良好な関係構築を通した世界情勢の安定と連携強化を促す極めて重要な役割にもつながるものであり、困難な状況においては尚更に日本語メディアならではの役割と発展が期待されるのである。

６．結論と今後の課題

6-1. 国交正常化前における日本語学習用教材としての日本語メディア

本研究では、1949 年から 1970 年代初頭までの国交正常化以前に中国における日本語の情報発信や交流に多大な貢献を果たしたアナウンサーや記者、そして、日本語メディアを通して学んだ当時の学習者へのオーラルヒストリー調査を実施し、得られた

す。それも、まあ渋い日本語を勉強するには非常に、渋い中国語を勉強する日本人にも役立った。だから私が編集長になってから、初めて意識的にですね、大学で『人民中国』を普及する試みをしたんです。それは『人民中国』が教室に入るというキャンペーンを、当時、北京外語大学の先生の協力の下でやってみたんです。今はものすごく交流の輪が広がってですね、だから今はですね、いくつかの大学が『人民中国』と契約してですね、いわゆる教育実践の基地としてるんです、『人民中国』を。だいたい 1 カ月くらいですね、学生がここ（※本社）に来て。雑誌作りの 1 カ月の全課程を体験して。翻訳、校正から最後の。まあ、企画の段階も聞いて、参加して、そして最後はですね、『人民中国』、非常にユニークな編集会議、タイトル会議があります。今さっき説明したように、タイトルは、文章はほとんど半分くらい中国語からなってます。その中国の文章を、もちろん日本語に翻訳します。しかしタイトルはですね、翻訳してもなかなか日本人読者にとっては伝わりづらいですので、リライトしますね。だから半日くらいですね、毎月半日くらいそのタイトル会議をやって、その時に日本人スタッフと中国人スタッフが一緒に集まってですね、議論するわけですよ。どうやったらもっと効果的に伝わるか。それは翻訳じゃなくて、超訳ですよ。だから『人民中国』では超訳の試みをしてます。リライトを通して。映画の題名もそうなんですよ。映画の題名も原題そのままだとなかなか伝わらないでしょう。特に日本の場合はそうでしょう。だからそういうふうに。タイトルを磨き上げるまで工夫するんですよ。それは大変、勉強になります。私個人の経験、中日交流をライフワークとしてやってきたんですけど、一番勉強になったこと、あるいは人生の富となったことは何かと言うと、いろいろ面白い、尊敬すべき人との出会いですね。だから『人民中国』というプラットフォームが本当に非常にユニークなところは、いろいろな人との出会い。まったく関係のない人かもしれないけど、この人と出会ったと。あとで考えたら面白い経験だと。そういうような経験の積み重ねは、非常に素晴らしい人生の体験だと思います。交流を通じていろいろ素晴らしい日本人との出会い、素晴らしい日本文化との出会い、そして日本文化を中国に紹介する、逆に中国に紹介するという仕事も携わっていて、非常に幸せな人生だと思います。」（M2 氏）

データの分析と、関係資料による考察を行うことで、中国の深い「日本理解」を支えたものを、メディア史の切り口からアプローチした。とりわけ、日本語学習と教育というこれまで着目されることの少なかった視点から、日本語メディアに着目し、日本との国交正常化前の中国において、日本語メディアはどのように活用され、それに携わった当事者はいかなる形で日本語情報の発信に携わり、どのような考えと手法で職務を全うしたかについて考察を行った。

今回特に着目した北京放送の事例からは、配信された放送の内容そのものが各時期の状況や情勢に適した形で作成されているため、それを用いた学習は日本と中国との関係等に影響を受けることなく行うことができ、むしろ時期によっては唯一の学習資源として積極的に活用されていたことが明らかとなった。さらに、中国国内の情報を海外に発信するという日本語メディア本来の目的の関係から、学習者には、配信される内容やその背景に関する知識が十分にあるため、日本語教材として作成されたものよりも、理解の面でより効果的であったことも判明した。加えて、北京放送の場合は、都市部以外でも電波が届くため、受信機があれば農村部等でも聞くことができたこと、録音すれば教室活動や複数名での学習にも利用できたこと、さらに、音声という言葉の学習に欠かせない要素を提供していたこと等の特性が、広く利用された要因となっていたことが明らかとなった。国交正常化前の中国において、日本語メディアは、内容としても、形態としても、時々の日本語学習ニーズに合致し、日本語人材育成に広く利用されていたことが指摘できるのである。

6-2. 日本語メディアを支えた人々

こうしたことが実現できた背景として、日本語メディアを担った人々の十分な専門性と、交流と相互理解に貢献しようという考えによる献身的な活動があったことも明らかとなった。アナウンサーは日々の研鑽を怠らず、現地で日本語を学んだ中国人専門家、帰国してアナウンスを学んだ帰国華僑専門家、日本から招聘された日本人専門家、の三者が、それぞれ協力し合い、極めて高度な日本語放送を支えていた。また、メディアとしての情報の正確さや新しさ、確実さについても、朝夕問わず配信できる体制が整えられており、記事を校正する、録音する、運搬する、放送する、局内の連絡をする、届いたお便りを整理し返信する、といった様々な役割において、それぞれの担当者が力を尽くし取り組んでいたことも判明した。そうした功績は国交正常化前の当時において広く認知されることは難しかった面があるが、日本理解を支えた日本語メディアの役割と共に、それを支えた人々の貢献を今、十分に振り返る必要のあるものと考えられる。そして、そうした功績を知ることは、現在と未来の日本と中国と

の相互理解や交流促進を考える上で極めて重要な示唆に富むものになると考えられるのである。

6-3. 今後の在り方や進むべき方向に関するビジョン構築のために

中国における日本語の学習は、戦後複数回にわたってさまざまな緊張状態に置かれた日中関係を「日本理解」という形でつなぐ役割の一端を担うものであった。そして、中国における「日本理解」をめぐる日本語メディアの歴史は、中国という国が、隣国と対話し、相互に理解することのできるチャンネルを絶えることなく設け、それを支えた人々の努力と尽力の歴史でもあった。

当事者のオーラルヒストリーという新たな角度から見出された戦後中国における「日本理解」を担ってきた日本語メディアの本質と根源からは、両国の人々の深い交流や親善、さらには日本政府や民間機関による経済・文化交流とその実施について、今後の在り方や進むべき方向に関するビジョン構築のための極めて重要な論点を提示してくれるものであると考えられる。

本研究は、これまで詳しく知られてこなかった国交正常化以前に中国における日本語による情報発信や交流に多大な貢献を果たした放送局・新聞社・雑誌社のアナウンサーや記者、編集者等のオーラルヒストリー研究を通じて、両国の相互理解と交流の歴史の新たな側面に光を当てたものである。今後は、研究倫理と法令に基づく手続きを経た上で、得られた証言のアーカイブス構築と個別のオーラルヒストリーの考察も順次発展的に取り組んでいきたいと考える。

参考文献

安藤彦太郎（2006）私の日中関係史=安藤彦太郎・早稲田大学名誉教授 父子二代「北京放送・中国語講座」講師 陳文彬先生『決断』24(1)，54-60

井川充雄（2016）BCL ブームの盛衰―戦後日本における海外短波放送のリスナー―『応用社会学研究』58，17-27

壱岐一郎（1991）『北京放送 365 日』河合出版

伊藤敬一（2000）『日中友好運動の半世紀―そのあゆみと写真―』日本中国友好協会

伊藤陽一（1988）国際放送の流れの量と方向に関する研究―モスクワ放送と北京放送の場合―『慶応義塾大学新聞研究所年報』30，41-60

外務省（1979a）総理訪中（第 2 回首のう会談）（A）

外務省（1979b）大平総理大臣の中国訪問に関する共同新聞発表

外務省（2008）『日中貿易額の推移（通関実績）＜米ドルベース＞』

＜http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/boeki.html＞（最終確認：2012.11.27）
国松昭（1982）中国の日本語教育『日本語教育事典』大修館書店，707-708
胡鳴（2012）田中訪中における中国の国民教育キャンペーン『国際公共政策研究』16(2)，59-73
胡耀亭主编（1996）『中国国际广播大事记』中国国际广播出版社
小池晴子（2009）『中国に生きた外国人 不思議ホテル北京友誼賓館』径書房
国際交流基金（2017）『海外の日本語教育の現状―2015 年度日本語教育機関調査より―』国際交流基金
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社
上海市大学日语教材编写组编（1975）『日语（日语专业用）』（第三冊）上海人民出版社
上海外国语学院日语教研组编（1981）『日语（日语专业用）』（第四冊）上海译文出版社
周平・陈小芬（编著）（2008）『新编日语』（修订本）上海外语教育出版社
人民網日本語版（2017）在日本中国大使館で懇談会「2017 年錦秋交流の夕べ」開催
宋尭（2012）日中国交回復過程における「日本語の三誌」及び北京放送『国際文化研究紀要』18，1-27
田中祐輔（2011）对中国大学日语专业基础阶段教材与日本中小学国语教材的比较研究――内容异同所体现的现代性课题『日本研究集林』37，复旦大学日本研究中心，32-42
田中祐輔（2012a）中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題『リテラシーズ』10，くろしお出版，21-30
田中祐輔（2012b）中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究―1960・1970・1980 年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷―『国語教育史研究』13，国語教育史学会，11-18
田中祐輔（2013a）中国の大学専攻日本語教科書の現代史―国語志向と文学思想―『言語文化教育研究』第 11 巻（特集号「言語文化教育の思想」），言語文化教育研究会，70-94
田中祐輔（2013b）中国の大学専攻日本語教科書に見られる日本の小・中・高等学校国語教科書との近似性の実態―掲載作品の様式・年代・題材の計量分析から―『計量国語学』28(8)，計量国語学会，279-295
田中祐輔（2013c）中国の大学専攻日本語教育における「国語教育」―教育委員会中

国日本語教師派遣事業から見る国語科教諭の教育実践と求められた役割―『国語科教育』74，全国大学国語教育学会，22-29
田中祐輔（2013d）中国における日本語教育論議の現代史―学術誌『日語学習与研究』（1979～2012）の分析から―『日本語教育』156，日本語教育学会，60-75
田中祐輔（2014a）日本の国語教科書は中国の大学専攻日本語教育においてどのように用いられているのか―教科書の設問に表れた指導内容の比較分析を中心に―『文学・語学』210，全国大学国語国文学会，26-38
田中祐輔（2014b）中国の大学における「日本語教育」ともう一つの「国語教育」―日中友好と相互理解に貢献した神奈川県教育委員会中国日本語教師派遣事業の発端・経緯・評価から―『ことばと文字』2，日本のローマ字社，くろしお出版，83-95
田中祐輔（2014c）1960 年代から 1980 年代の中国大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との関わりと教科書内容の変遷―文章の様式・題材を中心に―『言語文化教育研究』第 12 巻，言語文化教育研究学会，198-220
田中祐輔（2015）『現代中国の日本語教育史―大学専攻教育と教科書をめぐって―』国書刊行会
田中祐輔（2016）日本語教育基礎文法の国際比較研究―日本語教科書の日中対照調査から―『中研紀要教科書フォーラム』17，公益財団法人中央教育研究所，39-55
中国国际广播电台史志办公室编（2001）『中国国际广播电台部门志（第一集）』中国国际广播出版社
張国清（2006）『わたしと北京放送』外语教学与研究出版社
陳真（2001）『柳絮降る北京より―マイクとともに歩んだ半世紀―』東方書店
陈敏毅主编（2006）『远方的回声――海外听众与国际台的故事』中国国际广播出版社
特定非営利活動法人言論 NPO（2017）『第 13 回日中共同世論調査』
独立行政法人日本学生支援機構（2017）『平成 28 年度外国人留学生在籍状況調査結果』
鳥越俊太郎（2001）私たちの知らない最新中国人事情――青樹明子『日本の名前をください――北京放送の一〇〇〇日』『波』35(12)，27-29
坂東弘美（2007）中国国際放送局（北京放送）で最初の声を出した女性『音声表現』1，43-46
傅颖主编・中国国际广播电台日语部编著（2011）『七十年のあゆみ――中国国際放送局日本語放送開始七十周年記念特集』外语教学与研究出版社
北京大学日语教研室编（1964）『日语』（第二冊）商务印书馆
法務省入国管理局（2017）『平成 28 年における留学生の日本企業等への就職状況につ

いて』
本田弘之（2012）『文革から「改革開放」期における中国朝鮮族の日本語教育の研究』ひつじ書房
前田剛（2010.12.11）中国点睛特別編・日中の架け橋となった先駆者たち―元中国国際ラジオ放送局アナウンサー添田修平―『週刊ダイヤモンド』ダイヤモンド社, 116-118
御厨貴（2002）『オーラル・ヒストリー―現代史のための口述記録―』中央公論新社
李顺然著／傅颖・姜平译（2013）『二十世纪人留给二十一世纪人的故事――一位对日广播老人的回忆』外文出版社
李丹主编（2002）『CRI 中国国际广播电台』中国国际广播电台出版社

ウェブ典拠

「第 070 回国会予算委員会第 2 号（1972 年 11 月 2 日）議事録」（※国会会議録検索システム（http://kokkai.ndl.go.jp/）より入手）

【付記】

[1] 本研究は、公益財団法人JFE21世紀財団2015年度アジア歴史研究助成による成果の一部である。研究の機会を提供してくださった公益財団法人JFE21世紀財団の皆さまにこの場を借りて厚くお礼申し上げます。
[2] 本研究は、中国国際放送局、『人民中国』雑誌社、『北京週報』雑誌社、『中国画報』雑誌社、中国人民教育出版社の皆さまに多大なるご協力とご支援をいただいたものである。また、調査にあたっては、中国国際放送局アナウンサー王小燕氏、中国人民教育出版社外语分社副社长兼日语编辑室主任唐磊氏、『人民中国』雑誌社総編集長王衆一氏に格別な御力と御教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます。